

図書館報

GATEWAY

Vol.59

2024.11

エッセイから始めませんか？

出場者募集！

“本だけじゃない読書会”

12/17(火)16:30~17:30

本だけでなくマンガや映画・ドラマなど自分のお気に入りの作品を紹介しませんか？ 作品について、みんなでワイワイ語り合しましょう！

お申込みは、図書館6階
カウンターへ！

大阪商業大学図書館『GATEWAY』59号

編集発行：大阪商業大学図書館

読書、エッセイから始めませんか？



『陰翳礼讃』

谷崎 潤一郎 著
パイインターナショナル
914.6/Ta88

文豪谷崎の名随筆です。昭和初期の急速な西欧化を嘆き、和の文化の良さとその所以が叙述されています。でも西洋のしつらえも清潔で合理的で、捨てがたいなあ、なんて逡巡もあり。高尚な芸術論と尻ごみせず楽しく読んでください。陰影の美を表現した写真も美麗。



『ポケットに物語を入れて』

角田 光代 著
小学館
019/Ka28

著者が依頼された86編の書評や文庫解説を収録。既読本なら「そんな視点もあるのか!」と驚かされ、未読本なら読みたくなること必須です。ちなみに著者が初めて依頼された解説はかねてから大ファンだった忌野清志郎さんの『忌野旅日記』だったそうです。



『鉄道エッセイコレクション
「読み鉄」への招待』

芦原 伸 編
筑摩書房
686.04/A92

文豪・音楽家・ジャーナリストなど鉄道大好きの20人が書いた「鉄分100%」の短編アンソロジー。「各駅停車」、「夜行列車」、「駅弁」など7つのテーマに分けて鉄道旅の楽しさを伝えてくれます。鉄道に詳しくない人ものんびり列車の旅に浸ってください。



『イギリスはおいしい』

林 望 著
平凡社
596.23/H48

「イギリス料理は不味い」という定説に対し、現地の食文化をイギリス滞在生活から得た知見・体験をもとにリンボウ先生がライトに論評します。素晴らしい文化、美味しいものもちゃんどある。でも塩加減が変、とか、なんでそこまで煮ちゃう?とか。可笑しくてお腹もへる一冊。



『アマニタ・パンセリナ』

中島らも 著
集英社
近日配架予定

ドラッグについての体験と見識を綴った超異色エッセイ。ユーモラスな体験記に仕上がっています。読めば安易に手を出す気は確実に失せます。標題であるテングダケやサボテン、ヒキガエルや麦角菌の話など、歴史民俗の知識も豊富な充実の一冊。よい子は絶対マネしないで!



『ラオスにいったい何があるというんですか? 紀行文集』

村上 春樹 著
文藝春秋
915.6/Mu43

タイトルの「ラオス」と著者の「村上春樹」に心が引かれ手に取りました。雑誌やファーストクラス向けの機内誌に連載された旅行記エッセイです。ラオスだけでなく、著者が訪れた世界のさまざまな都市、ボストン、フィンランド、トスカナ地方など、カラー写真も多数収録されています。



電子書籍 (eBook) を読もう!!

現在、2,000点以上! もう本は持ち歩かなくていいんです!

図書館が契約しているeBookなら図書館に来なくてもいつでも読むことができます。閲覧方法は簡単! 学内LANや大学フリースポット (WiFi) に接続したパソコンやスマートフォン等のデバイスからも閲覧できます。

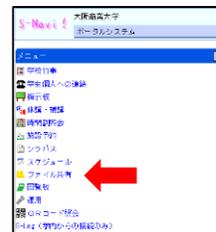
- メリットその1: 貸出・返却不要!
- メリットその2: 24時間いつでも閲覧可能!
- メリットその3: 電子なのでかさ張らず、紛失の心配無し!

学内LANや大学WiFiに接続しているパソコン等の場合
図書館ホームページの「調べる・探す」の「蔵書検索OPAC
(本を探す)」または「デジタルデータ閲覧サービス」から!



学外で利用する場合

S-Navil!のファイル共有にある「図書館デジタルデータ「学外」
接続マニュアル」を参考にまず設定!



※学外からの閲覧の際に必要な通信料等の費用は、利用者のご負担になりますのでご了承ください。

図書館百景

第二回 「とある壁」

図書館ならではの景観や物、図書館にこんな所がという意外な場所や物、など...。毎回ご紹介してまいります。

どこの壁だかおわかりですよ。1階から2階の入館ゲートに向かう階段でこの壁が目飛び込んできます。普通に四角の板を並べただけなのに、配色のせい? おしゃれですよ。毎日見たくなりませんか?



第10回大商大プチエッセイコンテスト

👑 授賞作品決定 👑

大商大プチエッセイコンテストは、本学学生がエッセイ形式で自分の考えを自由に表現する文章力を養うことを目的に2014年から実施しましたが今年度で一旦終了となります。来年は、コンペ形式ではなく、文章を用いてさらに自由に表現できるようなイベントを企画しますのでご期待ください。

最終回の今回のテーマは、①「私の学生生活」と②自由テーマでした。①では、たった4年の学生生活の中で今一度立ち止まり自分の学生生活について思うまま書きつづってくれました。②ではクラブ活動、アルバイトの中で得た気付きや人間関係の悩み、また夏休みの新たなチャレンジなど自由に筆を走らせてくれました。テーマ①10点、テーマ②13点、応募総数23点の中から厳正な審査により6点が選ばれ、10月25日に授賞式を開催しました。

受賞者は、以下の6名です。

<図書館長賞>

「僕にとっては意義のある4年間」 経済学科4年 カニカマ(ペンネーム)

<優秀賞>

「合縁奇縁」 経営学科3年 阿部 萌霞

「幸せと可能性」 公共学科4年 田熊 紫織

<審査員特別賞>

「大きなエバー・グリーンに乗って」 経済学科2年 豊岡 瑞希(ペンネーム)

「異国」 経済学科3年 Kolee(ペンネーム)

「本気」 経済学科4年 カスタード(ペンネーム)



受賞された皆さんと長妻図書館長(右端)、武藤事務室長(左端)

図書館長賞

「 僕にとっては意義のある4年間 」

自分の大学生生活を振り返ってみると、すべてが図書館に集約されることに気づいた。サークルにも入らず、何かの活動をするでもなく、友達と遊ぶわけでもなかった僕は、ひたすらに暇だった。暇だったから、よく図書館を利用していた。

授業の空きコマの時間では暇をつぶしに、暑いときは涼みに、寒いときは温まりに、雨が降った時は雨宿りに、調べたいことがあったときに、たくさん利用した。こんなにも足繁く通っていたから、本を読むようになった。たまたま手に取った本が面白くて、そこからどっぷりとハマった。活字に対して抱いていた苦手意識がなくなったのは、間違いなく図書館のおかげである。

いつしか、大学に行くというより、大学の図書館へ行く気持ちで電車に乗って通学していたと思う。図書館に通って、ついでに講義を受ける、みたいな。正直、日によっては大学に行くのが億劫な時もあったので、図書館の存在はどこまでいっても僕を助けてくれた。

消極的だった僕が「選書ツアー」なんてイベントに参加し

経済学科 4年 カニカマ(ペンネーム)

たのも、図書館に通って本に出会ったおかげである。僕を助け、僕に行動力を与えてくれた図書館には感謝しかない。

このように、僕の大学生生活は図書館で回っている。逆に言えば、それ以外は特にはない。書くことがない。客観的に見れば、あまり褒められたものではないかもしれない。けれど、僕は実に充実した4年間だったと、確信を持って言える。

穏やかに、肅々と、毎日毎日、図書館に通い、講義を受け、家に帰り、本を読み、課題をやり、ご飯を食べて、寝て、また朝が来る。僕は、この平和で淡々とした大学4年間をととても気に入っている。

これから社会人になり、自分に使える時間が少なくなっても、僕は空いた時間に本を読んだり、書店に行ったりするだろう。まぎれもなく、この4年で身についた楽しい生き方だ。大学に通ってよかったと、心の底から思う。



優秀賞

「 合縁奇縁 」

運を使い果たしたと思えるほどの経験を1回生の時にした。私が高校1年の時、生徒会長立候補者演説で、全校生徒を惹きつけてしまう程の話術の凄さと貫禄がある先輩に憧れた。その先輩の卒業後の進路は知らなかった。だが、高校3年生の時、本学のオープンキャンパスで、その先輩が学生スタッフとして居たのでビックリした。直接話すのはその時が初めてだったけれど、やはり、コミュニケーションマスターだった。私はそんな先輩のような学生スタッフになりたいくて、この大学を選んだと言っても過言ではない。

狭き門の学生スタッフの面接時には、入試の面接より緊張して震えた。無事に学生スタッフになれ、班が発表されたとき目を疑った。なんと!憧れだった先輩が私の班のリーダーだった! その時、私は運を使い果たしたと思うくらい喜んだ。

しかし、それも束の間、資格講座が始まり、学生スタッフとの両立は思い描いていたより遥かに大変で、周りの学生

経営学科 3年 阿部 萌霞

スタッフよりも後れを感じ、何度となく挫けそうになった時も、見放さず、育ててもらえたおかげで今の私がいる。

そして3回生となり、リーダー学年となった今年、嬉しいことが2つあった。

1つ目は、去年のオープンキャンパスで、私がなんでも相談で話していた子が、「私のこと覚えていますか?萌霞さんが楽しいと笑顔で話してくれて、私もそうなりたと思って…」と、入学して来て声をかけてくれたこと。

2つ目は、今年の班が発表された時、母校の後輩が、たまたま同じ班になり、驚きと嬉しさでいっぱいになった。

憧れる立場だった私がリーダー学年となった。諸先輩方に教えて頂いたことを胸に、初心を思い返すとともに、襟を正して、笑顔を忘れずに、楽しく向き合っていきたいと思う。

優秀賞

「幸せと可能性」

公共学科 4年 田熊 紫織

私は生きてるだけで十分だなんて綺麗事だと思っていた。2024年の夏、死ぬまでにやりたいことリストにチェックが入った。無人島に行くという夢が叶ったのだ。

全員初対面で挑んだ無人島生活。年齢も性別も立場も関係ない環境で共に過ごした2泊3日は、これからの長い人生の中で間違いなく転機となることだろう。

私たちは生きることの難しさを実感した。家も水道もガスも電気も風呂もトイレもない状態で、初めて会った人たちと全力で生きる。ご飯を作るために火起こしをする。初めは火の起こし方も分からなかった。火起こしを始めて3時間半。試行錯誤しながら私のチームの火が灯ることはなかった。けれど一度も弱音が出ることはなかったし、色々な可能性を信じて意見を出し合ったこの3時間半が無人島生活で一番楽しかったと言っても過言ではない。

食べる物は自分たちで調達する。決して満腹にはならない。

それが幸せだった。時間に縛られず、お腹がすいたから漁をして、楽しかったから歌った。みんなスマホの存在なんて忘れていた。この生活で幸せという言葉は何回使ったかわからない。

人生は無限に生き方と可能性がある。そう感じる事ができた無人島生活だった。家を捨ててヒッチハイクをしながら日本を放浪中の人、世界一周したいから仕事を手放す予定の人。やりたいことに全力で向き合う人の姿は輝いていて、私もそんなふうになりたいと思った。時間や世間に縛られない生活はあまりにも非日常で、こんな世界が広がっていることにも気付いた。今ならなんでも出来るような気がするし、失敗も全然怖くないと思える。

今はもう、生きてさえいればなんとかなるし、十分だと思う。生きることは大変なことだと学ぶことができたから。

この夏の出来事はこれからの人生の中でかけがえのないものになるだろう。この幸せをずっとずっと抱えて生きていきたい。

審査員特別賞

「大きなエバー・グリーンに乗って」

経済学科 2年 豊岡瑞希(ペンネーム)

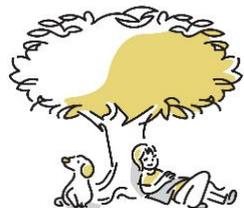
大学構内に立派にそびえ立つ一本の大きな緑の針葉樹。背の高さも、幹の太さも、枝の数も、葉の数も、類を見ないスケールだ。立ち寄って木陰で休まれば静かで心が落ち着く反面、威厳と風格への尊敬から芽生える物恐ろしさ、二つの相反する感情が両立し得る何ともセクリッドな空間がここにはある。

時間に追われ、約束に追われ、日常をただ生きてるだけで疲労きった身体と行く当てもなく彷徨い出した心は早急に居場所と対話の相手を求める。辿り着いたのは言うまでもなく、この“大きなエバー・グリーン”だった。

この針葉樹こそあらゆる混乱の中で燦然と立ち尽くしていたのだ。この樹を愛することは即ち、この樹を大事に次世代へと紡いできた多くの人々への感謝である。そして未来永劫、普遍的かつ永遠の緑を守り抜かねばならぬと使命感に焦燥を掻き立てられる。この時の洗練を受け切った樹は何よりも信用に値する。

声をかけてみたが明確な返答を得られない。樹を見つめる

己の感情から湧き上がってくる自然な想いの芽吹きを大切に、それを答えにするしかない。巨大な樹木の枝に乗かって世界を眺めまわしてみようと試みる。今まで見えなかった景色が澄み渡り、これまで如何に狭い空間で生きていたかを知る。でも綺麗な景色だけが見えるわけではない。知らなければそれはそれで良かったであろう、負の側面に目を当てざるを得ない。今日もまたどこかで狼煙が上がり、銃声や悲鳴が聞こえる。見えたものを見なかったことにはできない。一度乗った枝からは一生降りられない、死ぬまでこの樹と対話せねばならぬのだ。つまり私は針葉樹の礎にされたしまったのだ。そう感じた瞬間、足を滑らせ落ちてしまった。夢だった。目が覚めるとGATEWAYの中。目の前に新聞が広がっていた。返却間近の「ハックルベリーフィンの冒険」が横にあった。チャイムが鳴った。また時間と約束に追われる生活が始まった。



審査員特別賞

「 異国 」

留学は多くの人にとって夢の一つですが、私はその中の一人ではありませんでした。しかし、異国の地で学び、文化を体験することは、なんとも刺激的な経験でした。私はアメリカの大学で、さまざまな人々と出会い、多くの経験をしました。

最初の頃は、言葉の壁や文化の違いに戸惑うことが多かったです。もちろん、授業はすべて英語で行われ、初めは講義についていくのが難しく、無断で授業を録音することもありました。今となっては、良い思い出です。そして、少しずつ慣れてくると、クラスメートとのディスカッションなどが苦ではなくなり、英語力も向上していきました。特に、異なるバックグラウンドを持つ学生との意見交換は、未知の生物と遭遇したような新鮮な感覚を味わわせてくれました。

また、留学生活では地元の人々との交流も大切な体験の一つでした。大学のイベントやボランティア活動に参加することで、自己肯定感を高めながら、さまざまな人々と交流すること

経済学科 3年 Kolee (ペンネーム)

ができました。特に心に残ったイベントは、各国の文化を披露するカルチャーショーです。百人はいたであろう観客の前で、私が尊敬する尾崎紀世彦さんの「また逢う日まで」を歌わせていただきました。緊張から歌いきれるか不安でしたが、友達の応援もあり、ショーは盛況のうちに幕を閉じました。

感無量な思い出もありましたが、常に楽しいわけではありませんでした。ホームシックや孤独感に悩むことはなかったものの、時折「自分は何をしているのだろう」という喪失感に襲われることがありました。その原因が睡眠不足だと判明し、改めて睡眠の大切さを実感しました。

振り返ってみると、留学生活は私にとって感慨深い経験でした。学問だけでなく、人生におけるさまざまな教訓や配慮を学び、自分自身を見つめ直す良い機会となりました。留学が誰にでも良い経験となるわけではありませんが、さまざまな経験をするための一番簡潔な方法だと思いました。

審査員特別賞

「 本気 」

私の大学生活を一言で表すなら「中途半端」である。大学での四年間、何かに本気で打ち込むということをしなかった人間特有の虚無感がそれを自覚させてくる。私の日常はただだらと授業を受け週四バイトをしながら、ゲームや動画を見るといった面白みに欠けるものだ。大学での友人も二人いるが、年に数回遊びに行くぐらいで仲良しとは微妙に言いづらい。

このように積極的に遊ぶ訳でもなく、勉強や趣味に没頭する訳でもない私だが決して四年間毎日やる気がなかったわけではない。入学したての春、とある部に入り大学生活を充実させようと思気込んでいた。部の説明会を受け聞き終わった後、活動する時連絡するからと言われた私はそのまま連絡を待つ。そして一年生の私は部に入らず終了した。何を言っているんだと思われるだろうが事実だ。具体的には連絡は来ず、自分から連絡もせず馬鹿正直に待ち続けた私は一年を棒にふる。

一年の中盤「待ってても無駄」ということに気づいたが、既に部で仲間同士の輪があり、そこに入るのには難しいと決めつけ逃げたのだ。

経済学科 4年 カスタード(ペンネーム)

さて一年何もしてないことに危機感を持った私は、改めて部を探し無事入部した。その部は三人で運営されていた体育会系である。入部理由は少人数なら輪に入りやすいという浅いものだ。それが良くなかった。まず活動にやる気がなく練習は週一。しかもそれすら無い時の方が多い。では部員の仲はというと互いに無関心、輪自体がなかった。その空気と私の持ち前の逃げ癖により真剣に活動に打ち込まなかった。後は覇気のない日常を送る毎日。やったことといえば何かの資格本を買って放置したぐらいだ。そんな大学時代何もしなかった人間を社会はあまり欲しがらず希望ではない職につくことになった。

何かに本気で取り組まない人間は後悔することになる。これを見て一人でも生活を見直してくる人がいるなら少しは私の大学生活も意味があるものだったのかもしれない。

